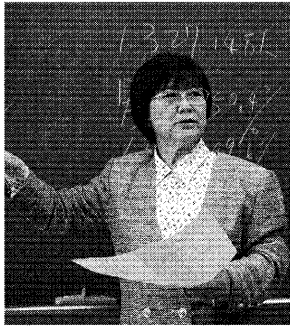


## 李 秀 英 先生



### 主なご経歴

- 1968年7月 中国大連外国語学院日本語学科卒業
- 1970年10月 中国河北大学外国語学部 教員
- 1980年9月 中国河北大学外国語学部 講師
- 1988年1月 中国遼寧師範大学 助教授
- 1993年4月 福岡県立大学 助教授
- 1999年4月 岩手県立大学国際社会人センター 教授
- 2000年4月 岩手県立大学社会福祉学部 教授

## 李先生と「チェンピン」の話

「トウモロコシの粉を水で溶いて、大きな丸い鉄板にひろげて焼くでしょ。なんていったっけ、そう、チェンピン、あれが食べたい」とぼくがいう。

「チェンピン…、どうしてそれ知ってるの」と、ちょっとビックリした李先生。ある日のこの大学の食堂での会話である。

この中国風クレープの話をしようとすると長いことになる。おそらくそれは1944年の冬のことだが、ぼくは坊主頭の小学3年生だった。その頃住んでいた中国東北地方のある町を走る市電の終点近く、古びた直ぐにも倒れそうな暗い家にぼくは通っていたのである。さすがにこの頃になると、この町でも食糧事情が悪くなっていたのだろうか、母親にいわれて、ぼくはそこへチェンピンを買いに行った。そこのおばさんが、溶いたトウモロコシの粉を鉄板の上に広げて焼く手つきをしげしげと眺めたり、その香ばしいにおいを楽しんだりしたというのが、はるかに遠いぼくの幼い記憶に残っている。

「チェンピン…、それ家にあるよ。このまえ大連のスーパーでおみやげに買ってきた。でも、そんなもの、どうしておみやげになるのっていわれた…」というわけで、ぼくは60年ぶりにチェンピンを味わい、幸福な遠い記憶をとりもどすことになった。いただいたチェンピンは、記憶の中のものよりはおいしくて上品な感じがした。これは、李先生との出会いがなければかなわぬことであった。

李先生には、中国の大学で日本語を勉強した後で文革に出会い、下放を体験されたときのことをうかがったり、先生が上海でされた高齢者の面接調査の報告書を頂いたりもした。下放の時のお話には、先生は少し口ごもりがちだったから、そのうちにもっとうかがいたいこともあったような気がする。上海の報告書は、ぼくよりも年上の中国の人たちが自分たちの国をどんなに誇りに思っているかが分かって、ぼくには興味深いものだった。そのほかにも、お話ししていただきたいことが沢山あったと思っている。

その李先生がこの大学をお辞めになってお国に帰られるということで、ぼくらはひどくさびしい気持ちになっている。それはもうこれからチェンピンをもらえない（これはぼくにとっては重大事だが）というだけでなく、あの元気のよい先生のお話を教授会やコースの会議で聞けなくなるということもある。しかし、先生はこれからのために準備されたご自宅のある大連で、地域の研究活動やボランティア活動に参加されながら、おつれあいとの老後の生活（とは、まだまだ早すぎる気がするが）を楽しまれるご計画とのことなので、そうすると「どうぞ、お幸せに」としか申し上げようがない。そう、「どうぞ、末永くお幸せに」。そしてチェンピンの大好きなぼくのこともお忘れなく。

(菊池章夫)